

# 上級日本語学習者を対象とした 発音指導に関する一考察 —イントネーションに焦点を置いたテキスト開発—

中川 千恵子・中村 則子

## 1.1 これまでの発音指導の特徴

日本語学習者の発音を聞いて、問題があると感じるがどうしてよいかわからないという現場の日本語教師の声をよく耳にする。とりあえず、正しいと思われる発音をしてみて模倣させてみるが、リピートのときは直せたと感じて、数分後には元の木阿弥であり、挫折感を感じているというのが現状ではないだろうか。

## 1.2 教師心理と学習者心理のギャップ

重要なのはコミュニケーションであると考え、発音矯正に抵抗を感じている日本語教師も少なくない。

それでは、なぜ、文法や作文や会話などを教えるのだろうか。

早稲田大学日本語教育研究センターでは、これまで6年半発音コースを続けてきた。半期ごとの履修者数の多さが示しているように、発音を改善したいという希望を持っている学習者は多い。学習者はなぜ、発音指導を受けたいのか。コース開始時アンケートからは、「発音がいいとかつこいいから」「発音のせいでわかりにくいことがあったから」「伝わらないのではないかと感じて自信がなくなるから」「発音がいいと就職に有利だから」というような学習者心理が窺える。

## 1.3 どこに問題があるのだろうか

漠然と模倣させる指導法は、単音を直してみたり、アクセントを直してみたりすることになり、学習目標が焦点化されていないという問題点がある。また、既存のテキストもあるにはあるが、選択できるほど数が多いわけではない。つまり、発音指導の困難点解決のためには、学習者も教師も挫折感を感じないと同時に、学習者にとっては学習可能であり、教師にとっては指導可能な方法とその方法を実施するためのテキストの開発が必要となる。

## 2. テキスト作成の経緯とテキストの目標

### 2.1 テキスト作成の経緯

筆者らは、中川 (2000a, 2000b) の研究成果に基づいて、上級日本語学習者向け発音コース (半期約13回) を実施し、すでに10回以上続けてきた。このコースで使用したハンドアウト類を、中村・許が検討し内容を充実させて、2005年度に『対話のための日本語発音練習』(試用版) として、約200ページのテキストを開発した。その後、半期ごとに改訂している。

### 2.2 テキストの目標

このテキストは、聞き手にとって聞きやすくわかりやすい発音の習得を目標とする。主に人前で発表するプレゼンテーションなどのフォーマルな場面で必要な発音について学ぶ。

## 3. テキストの特徴

### 3.1 「へ」の字型イントネーションに焦点を置いたフレージング練習

日本語イントネーションの特徴である「へ」の字型イントネーションに焦点を置いた練習を行う。意味と関係した適切な句切り、および、アクセントを実現して「へ」の字型のフレーズを形成することをフレージングと呼ぶことにして、その練習を行う。その際、各フレーズで注目するアクセント核は一つだけでよいとして、学習者の負担を大幅に軽減した。

### 3.2 視覚的確認

句切りやアクセントや「へ」の字型イントネーションを確認するためには、耳だけでなく、目で見て確認することが役立つ。耳で確認しにくい人もいる。そこで、この本では、アクセント記号や、句切り記号や、声の高さを曲線で示したピッチカーブというものを使っている。目で見て、耳で聞いて、声に出して学び、意識化し、さらに授業後の自律を目指す

という狙いがある。

### 3.3 協働的学習

本テキストで練習するのは、主にスピーチなどの独話であるが、聞き手との「対話」を重視し、聞き手の反応も重要であると考え。教室活動はそうした参加者全体の協働作業であると捉え、このテキストがその手がかりとなるように作られている。

## 4. 基本となるコンセプト（頭に入れておいてほしいこと）

以下は、このテキスト作成者たちの基本的コンセプトである。

### 4.1 発音の焦点化と意識化

問題点を焦点化して意識化することで、日常的に話すときも意識的に聞いたり話したりするようになり、授業以外も、更にはコース終了後も学習し続けることが期待される。

### 4.2 問題発見解決能力育成

テキストの項目が発音に関する全ての問題点をカバーしているわけではない。問題にぶつかったとき、どうすればよいのか自ら考えて対応できるようになることが重要である。

### 4.3 進歩を信じること

発音練習を意識的に行えば必ず進歩はあると信じるのが重要である。しかし、進歩は人によって違う。また、人はそれぞれ苦手分野や得意分野が違うということに留意すべきである。

### 4.4 現実との差異、発音のバリエーションを否定しない

実際の日本人の発音には、それが東京出身の人であってもさまざまなバリエーションがある。アクセント辞典や教師が絶対的なものではない。実際の場面において自律的に対応できるようになるために、いろいろな日本人や友人の話し方を聞いて、自分なりの発音をつかんでいく必要がある。

## 5. 協働学習の参加者

協働学習の参加者は、話し手であり聞き手である学習者・教師・ボランティアである。三者が互いに協力・支援しあって協働学習を行うことで、よい人間関係を築くということも学習目標である。

### 5.1 学習者

人は声という道具を媒介物として用い、相手に働きかける。その道具を使いこなすこと、つまり、発

音の練習は大切なことであると言える。上級レベルの問題として、内容はよくても、発音が悪くて伝わりにくかったり、たいしたことを言っていないような印象を与えてしまう場合がある。上級レベルの発音の勉強は、自尊心や自己実現の欲求を満たすためであるとも言えるだろう。

## 5.2 教師およびアシスタントとして参加するボランティアや学習者の周囲の日本人

正しい日本語とは何か、母語話者並みの発音とは何か、それを目標とすることに疑問を持っている人もいるかもしれない。しかし、学習観は一つではない。学習者が克服してみたい、やってみたいという希望をもっているのだったら、それを支援し、ともに学び、喜びあうという学習者の希望も尊重したい。

発音は人によって違う。自分の発音はバリエーションのひとつかもしれないということも含んで、自分自身の言葉を改めて見つめ直す機会と捉えてほしい。

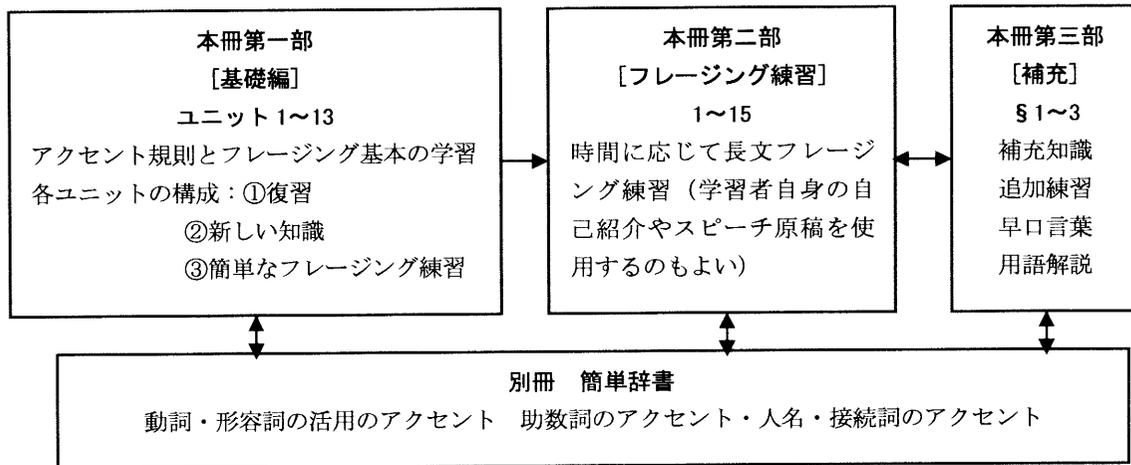
## 6. テキストの使い方と構成（フローチャート）

大学における半期 13～14 回のコース、1 コマ 90 分を想定して、第一部は 13 ユニットで構成した。1 コマで、第一部 1 ユニットと第二部のフレージング練習の一部を学習するように意図した。

第一部の各ユニットは、①復習 ②新知識の導入 ③簡単なフレージング練習 という順に学ぶことになる。第二部にある長文のフレージング練習を行うことで応用力を高める。自分で書いた自己紹介や口頭発表原稿を使用して練習すれば、より効果的だろう。

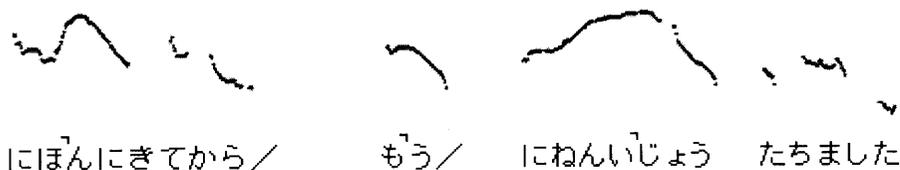
発音の授業にそれほど時間がとれない、あるいは、学習者の日本語レベルにより、それほどスムーズに進められないのであれば、基本的なことだけ学習すればよい。ユニット 4 まではゆっくりでも全部終えて、ユニット 5 以降は適宜必要な箇所のみ取り上げて勉強するというコースも設定可能である。特に、第一部のアクセント規則についての学習や練習は時間がかかる場合もあり、徹底的に行うか導入程度に留めるかは学習者次第だろう。

別冊の簡単辞書は、アクセント辞典で調べるのが難しい形容詞や動詞の活用表、助数詞などのアクセント表及び人名アクセントなどを載せた。



### 7. テキストおよび授業内容例

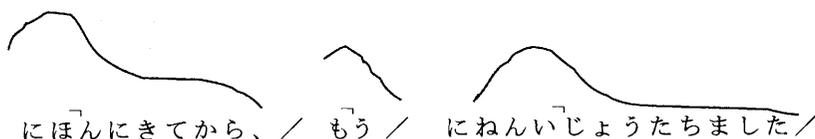
音声分析ソフトに抽出された声の高低を示すピッチ曲線では、以下のようになる。



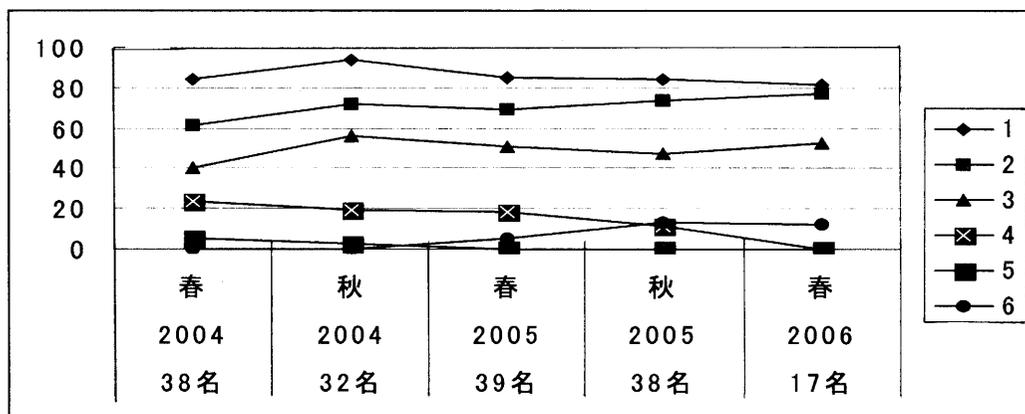
ここでは、句切り（区切れ）、アクセント核によって、一つのまとまりのあるフレーズ（句）が形成されていることがわかる。フレーズは「へ」の字である。しかし、このピッチ曲線は、無声子音の断絶があり見難いこと、パソコンソフトが常にそばにあるわけではないこと、録音環境の整備や、ピッチ曲線をきれいに抽出することの問題点など、限界がある。そこで、このテキストでは、より見やすく、より簡便な方法として以下のような手描きの方法を考えた。

学習者自身が、音声を聞くこと、アクセント辞典を使用することでこの手描き部分が描けるようになるのが学習目標となる。学習者の負担を減らすために、

「きてから」のように、一つのフレーズ内の後ろのアクセント核は生成義務とせず、フレーズの最初のアクセント核に注目して「へ」の字型イントネーションを形成するように指導する。



## 8. 学習可能か？（学習者アンケートのグラフ）



1	2	3	4	5	6
役に立つ	やってみる	できそう	できなさそう	役立たない	もうやらない

図1 学習者アンケート フレージングは役に立つか（縦軸は%を示す）

図1は、各コース終了時に学習者に対して実施したアンケート結果である。

アンケート結果は、学習者がこの指導法に対してどのように評価しているかを示している。

- ① フレージングは役に立つかという質問に対して、役に立つと答えた学習者は毎回 80%以上いた。
- ② 今後もフレージング方法をやってみると答えた学習者は、漸次増加し、80%近くになっている。
- ③ 自分でできそうだと答えた学習者は約 50%、できなさそうだと答えたものは、20%（2004 春）から 0%（2006 春）に漸次減少している。

## 9. 結論（学習可能と指導可能と自律への足場かけ）

8のアンケート結果は、本テキストの方法が学

習可能であることを示している。また、今までに使用した数人の教師からも、指導可能であったとの評価を得ている。本テキストを使用した学習活動が、周囲にある音声媒体を利用し、周囲の人の支援を得ながら、学習者が自律学習を続けていくための、足場かけとなると信じている。

### 参考文献

- 中川千恵子 (2001a) 『日本語学習者のプロソディー習得とその指導法』お茶の水女子大学博士論文  
 中川千恵子 (2001b) 「「へ」の字型イントネーションに注目したプロソディー指導の試み」(2001b) 『日本語教育』110号、日本語教育学会、pp.140-149  
 中川千恵子・中村則子・許 舜貞 (2006) 『対話のための発音練習』(試用版) 中川聖一・小林聡 (1995) 「自然な音声対話における間投詞・ポーズ・言い直しの出現パターンと音響的性質」『日本音声学会誌』51巻3号、202-210.

なかがわ ちえこ 早稲田大学非常勤講師  
 hana@k06.itscom.net

なかむら のりこ 慶應義塾大学非常勤講師  
 VZB12463@nifty.com